

は、二時間程の「つくる」時間を共有する、親子のほほえましい姿が、くりひろげられていました。

まるで、昔し昔しの親子の様に。

(株シエバル)

児童館の露天風呂作り

宮里 和則

夏。滝王子児童センターの庭。子どもたちは穴を

掘っている。大きな穴だ。

スコップで掘ると、米屋さんからもらった袋に土

を入れ土嚢を作っている。

露天風呂を掘っているのだ。

その横ではドラム缶風呂。煙がもくもくあがつて

いる。

恒例になつた夏休みの最後のイベント、露天風呂

作りである。

毎年のように通つてくる子もいる。

温泉みたい——露天風呂の始まり

それは数年前、たき火のことである。灰や燃え残った木を片づけ、庭を掃いていた。

Mちゃん（三年）がさつきまでたき火があつたところに水をまいた。

すると、シユウッと湯気が上がり、水が一瞬で沸騰した。

「わっ」と歓声。

「温泉みたい!!」

確かに何もない地面から、泡が立ちお湯になる姿

は、温泉である。

「温泉掘つてみたい！」

そして穴掘りが始まつた。何日もかけ穴が掘られた。雨が降れば泥風呂になつてしまつた。

穴を掘るとドラマが生まれる

穴から様々な物が掘り起こされた。石が出てくると、化石だと言つて騒ぎ、缶が出てくると、原始人が飲んだジュースだと言い、瀬戸物が出てくると、原始人のお皿になり、長い針金が出でくると、大ミズの化石が発見されることになる。そして、発掘された物を展示する、博物館が必ずできるのだ。

普段は、土なんか大つ嫌いと言つているH君（四年）も、このお祭り騒ぎにのせられ、「なにやつてるの」と言つてきた。もちろん、子ども独特的の、やりたいという表現なのだから、彼がスコップを握るのも時間の問題である。

そう、今の子どもたちは「土が嫌い」と言う。滝王子のお祭りのステージで、土の好きな人、嫌いな

やがて、この穴にブルーシートをかけプールのように作ればいいことに気付き、露天風呂が生まれたのである。

人と言つて、手を挙げてもらつたら、半分以上の人
が、嫌いだつた。

確かに今の私たちの生活は、土を嫌うスタイルで

ある。マンションの床は、土で汚れた靴で踏むと大

変なことになる。

私自身、三階の我が家に帰るとき、階段が泥だら

けになつっていたのを見つけて、何だこれはと思つてしまつた。そして、その足跡が我が家まで続いていた

時は、ドアを開けて息子たちに「掃除してきなさい!!」と怒つてしまつた。

こんな状況だから、土嫌いの子どもが増えて何も
の不思議もない。

最近では、泥団子を作つたことのない子どもも出
てきてゐるのだ（だからこそ土と関わるイベントの
必要性を感じる。幼稚園、保育園では、ぜひ泥団子
コンテスト、泥団子レースをやつてほしい）。

気がつくと、H君も、泥だらけになつてゐる。

「つるはし、使つてもいい？」とH君。

「よし、みんなどいでどいて。危ないからな」「あまり後ろに振り切るなよ。自分をささないよう
に……」

「よいしょ」

振り下ろすと、こちんと地面に当たつて、つるは
しが倒れてしまう。

「俺にかして見ろよ」とそばで見ていた中二のO
君。

さすがに中学生。見事な掘りっぷりである。一掘
りごとに歎声が上がる。

O君の友達も加わり、ぐんぐん穴は深くなる。

夏休みの宿題をやりに、センターの後ろの図書館
に行くところだつたのだろう。参考書や問題集が庭
の隅に置かれている。汗だらだらである。蝉の声が
やけに響く。

「こんなもんかな」

私に目を合わせ、にこりと笑う。

うなずくと、「また後でくるよ」と言つて手の泥

特集 〈つくる〉

をはたきながら、図書館へと向かつた。

穴を掘れば、人の輪ができる

いろいろな掘り手がいた。

Aくんは中学一年生。最初は「なにやつてんだか」という感じで見ていたが、知り合いの小学生に誘われ、穴掘りを始めた。

しばらく掘っていると、カツチンと石の手応え。

周りを掘つてみると、かなり大きい。つるはしでも手に負えない。周りを少しずつ掘り進む。

どのくらいたつただろうか。やつと石がぐらりと動いた。でもここからが大変である。スコップを横に入れたり、つるはしを使つたり。A君はもう考古学者のようである。

とうとう石は掘りあげられた。

縦五十センチ直径三十センチぐらいの円柱。切り株のように作られたコンクリートの固まりだった。「やつたあ」、子どもたちの歓声。A君は一躍ヒー

ローになってしまった。

コンクリートの固まりは、さつそくそばに作られた、博物館に展示された。

ん

ボランティアのR君（二十三歳）が言つた。

どうやら、彼がこの児童センターの学童だった頃の遊具だつたらしい。

子どもの頃を語るR君。A君とR君は、急に何か親しくなつたように見える。

遊具だけではなく、R君の子ども時代もいっしょに掘り出されたのかもしれない。

もう、夕暮れだつた。



掘りおこされるイメージ

話はとどまるところを知らない。
イメージの核が掘り起こされたのだ。

こんなこともあった。掘つていくと、れんがの固

まりにぶつかつた。

周りを掘つてみると、大きい。

「壁だよ、壁」

「あつ、段々になつている……階段だ」

「でも、何でこんなところに階段があるんだ？」

子どもたちの謎は深まるばかり。

「地底人でもすんでいるんじゃないの」と一人がぼ

そつと言うと、みんな急にわきたつた。地底人とい
う言葉が、みんなのイメージに火をつけた。

「どんどん掘つていたら、地底人の天井に穴あけ

ちやつたりして……」

「下で、地底人が家族でご飯食べていたりして

……」

『困るなあ、こんなことして』と言つて怒つたり

してね……』

露天風呂完成

こうして穴を掘り続け、とうとう露天風呂完成の
日を迎えた。

掘られた穴の周りに木枠をつけ、作つた土嚢で押
さえる。

そして、ブルーシートをかけ、さらにシートを土
嚢の下に巻き込めば出来上がりである。

お湯は湯沸かし器からホースで引いて、流しそう
めん用の竹のといを通して湯船に……。

ほんとに温泉気分である。

入浴剤を入れると、いい匂いが庭中に広がつた。

6年のN君が、入浴剤の効能書きを朗読した。

『疲労回復、打ち身、捻挫……』。庭の向こうの道
を通る人が、何事かとこちらを見る。そして、気持
ちよさそうに温泉に入つてゐる子どもを見て、に

こうと笑いながら通り過ぎていく。

ここは、東京・品川・大井五丁目、滝王子児童センター。

夏休みが、のどかに過ぎていく。蟬はまだないでいる。

(滝王子児童センター)

日常の遊びの中で突然気づいた体験

—U夫がつくれたテントから—

清原 規子

この四月にU夫は一年保育で私たちの園に転入し

た。

てきた。U夫のご家族とも話ををして、おとなとの援助が少し必要だろうということで私が彼の担当となつ

てU夫に関わつてくると、無理することなく、自然